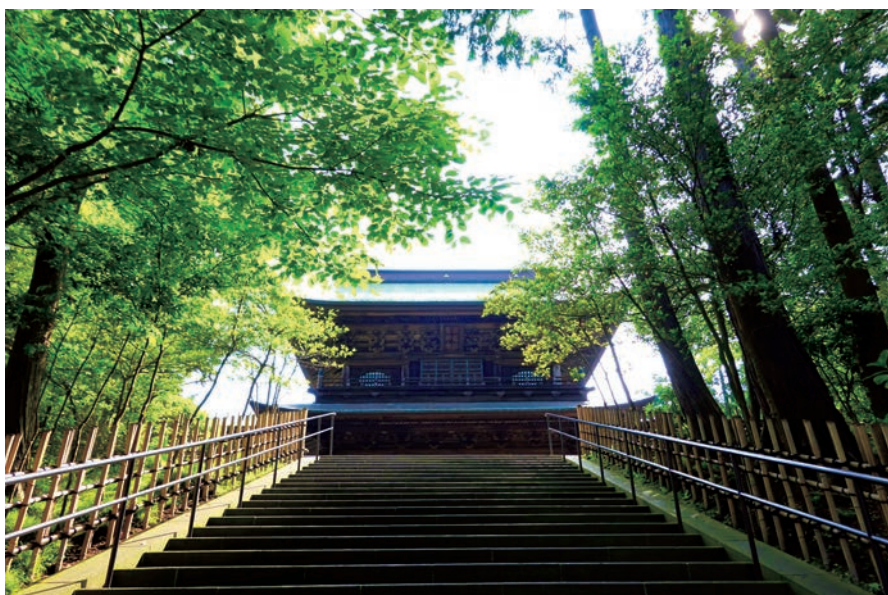
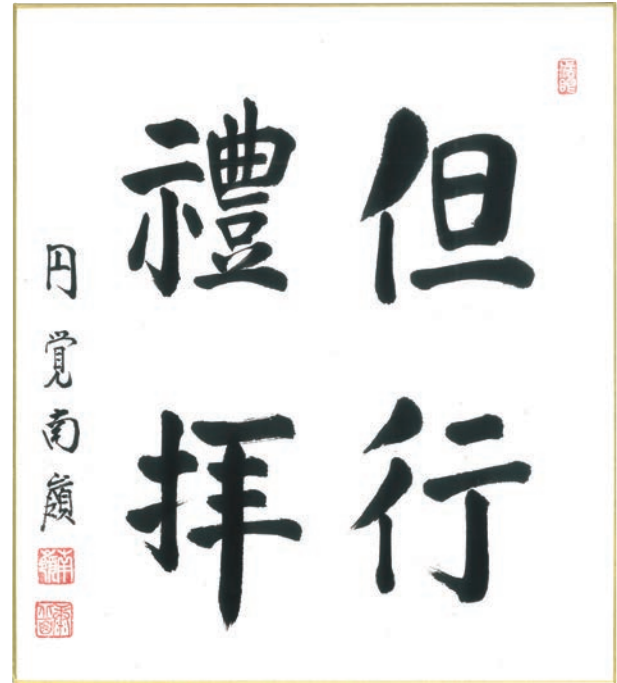


円覚

令和3年 うらぼん号

334号





拜む心で生きる

管長 横田南嶺



境内に観光に見えた方から、「円覚寺は何宗ですか」と聞かれることがあります。そんな時には、「禅宗です」と答えます。少し詳しい方ですと、更に「臨済ですか曹洞ですか」と聞かれます。そうしますと、「臨済宗であります」と答えます。

禅宗と一口に言っても、日本の禅宗には、三つの宗派がごいます。臨済宗、曹洞宗、そして黄檗宗であります。中国においては、五家ごけとって、五つに分かれていました。

臨済宗、曹洞宗、雲門宗、いぎやう 沩仰宗に法眼宗であります。そのうち、臨済宗と曹洞宗の二つが、鎌倉時代に日本に伝わりました。

黄檗宗というのは、江戸時代に日本に伝わった中国の臨済宗であります。日本の禅宗に三つあると言いましても、大きく分けて申しますと、曹洞宗と臨済宗の二つだと行ってよいでしょう。

曹洞宗は、鎌倉時代に道元禪師が、中国に渡って修行して日本に伝えたことで知ら

円覚334号目次

管長猊下 色紙	表紙II
拜む心で生きる／横田 南嶺	1
信心ことはじめ ㊸	10
みとりのころ(三)／鈴木 秀子	12
鈴木大拙の言葉と生涯(三)／蓮沼 直應	22
死の恐怖を無くす方法は探さなくて良い／桜井 竜生	28

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所



僧堂 堂内

れています。臨済宗は、道元禅師よりも少し前に栄西禅師が伝えたとされています。

同じ禅宗であっても、この二つにどういう違いがあるのかというと、分かりやすいところでは、曹洞宗では壁に向かって坐禅して、臨済宗ではお互いに対面して坐禅することだと言われたりします。ただ、この問題なども、難しいところで、もともと臨済宗も壁に向かって坐っていたらしいのです。江戸時代になってから、対面して坐るようになったと言われています。

他にも、坐禅の時に叩く棒のことを臨済宗では「けいさく」と言い、曹洞宗では「きょうさく」と言うとか、五祖弘忍禅師のことを、曹洞宗では「ごそこうにん」と呼び、臨済宗では「ごそぐにん」と呼ぶなどという違いもあります。

修行の上での大きな違いは、「公案」を用いた禅問答を行うかどうかでありましょう。

「公案」というのは、元来は、「公文書の下書、官府の調書、訴訟の目安」という意味から、禅宗では、「参禅者に対して言葉で与える課題」を表すのだと『広辞苑』で説明されています。「官庁の採決案件」のことだと『禅語辞典』にはございます。『禅学大辞典』には、「おおよけの法則条文をいい私情を容れず遵守すべき絶対性を意味する。転じて禅門では、仏祖が開示した道理そのものを意味し、学人が分別情識を払って参究悟了すべき問題とされる」と解説されています。

公案の修行というのは、そのような「先人の言行などを内容とする難問を与え、それを思考させることを通じて、とらわれの心

から脱却させ悟りの世界に入らせることを目的とする」ものだと『広辞苑』に書かれています。

禅問答というと、もともとは、修行僧（雲水）が指導僧（師家）に尋ねる場合や、師家から、雲水に対して問いかけるものなど、さまざまありました。それから、みんなの前で、公開して行われる場合もあれば、密室に入って一対一で行われるものもありました。

臨済宗の修行では、今ではほとんど、密室において一対一で、師家の方から雲水へと、祖師の残された言葉が課題として与えられるものとなっています。それがまた容易に答えの出るような問題ではありません。

両手を打てば音がするけれども片手ではどんな音がするか（隻手音声）とか、両親から生まれる前の本来の姿はどうかなどとい



僧堂 室内

う問題であります。

夏目漱石は、若い頃に円覚寺の釈宗演老師について修行し、この両親から生まれる前の本来の姿はどのようなものか（父母未生以前本来面目）という問題を与えられていました。かの漱石も、容易に答えが出なくて苦労されたようであります。

そのような問題に、自分なりの答えを持つてゆくのでありますが、はじめのうちは何を言っても否定されて追い返されてしまうのであります。

円覚寺の開山仏光国師ほどのお方であっても、径山万寿寺において仏鑑禪師に参禅して、趙州の無字を公案として与えられました。

昔趙州和尚に修行僧が、狗にも仏性がありますかと問うと、趙州和尚は「無」と答え

ました。この「無」の字を見てこいと言うのであります。

仏光国師は、問題を出された当初、こんな問題は一年もあれば片付くだろうと思われたのですが、一年経っても埒が明かず、二年が過ぎ三年が過ぎて、四年五年となりました。その間、僧堂の門から外には出なかつたということです。

そうなつてきますと、「無」とは何か、「無」に対する答えが出るというよりも、体全体が「無」になつてしまい、更には天も地も悉く「無」の一字になつてしまったという体験をしたと説かれています。

そうして、全身全霊「無」の一字に成りきつて坐禅していて、ある日の明け方、時間を告げる為板を打つ音を聞いて、本来の自己が顕わになつたという体験をされたのでした。

このようにして、はじめは何を言っても否定されてしまい、とうとう何も言うこともなくなつてしまい、万策尽きて窮しきつて、そこから新たな心境が開かれるということを体験させるのであります。

ただ、その一時の体験だけでよしとするのではなくて、そこから更にいくつもの公案を順に透過していくことが、臨済宗の修行の特色であります。

私は、十三歳の頃から、この公案に取り組み始めました。紀州由良の興国寺の目黒絶海老師に参禅して、はじめは「心の坐りを持ってこい」という公案をいただきました。それから更に「両手を打てば音がするが、片手の音を聞いてこい」という公案をいただい

て修行してきました。そんな頃から、ほぼ二十年間、公案の修行を続けてきました。二十年経った頃に、今度は師家という公案修行を指導する立場となり、更に二十数年が経つのであります。実に四十数年もこの公案に取り組んでいます。

この公案の答えを持って、師の室内に入つて問答することを、「独参どくさん」と言っています。

私は、修行する立場として独参を二十年行い、今度は指導する立場として、二十数年行っています。

特に独参は、何度師の室内に通つても、叱られるか、にべもなく否定されるか、竹しほ篋べいで打たれるか、はたまたすぐさま追い返されるかの連続なのであります。

今では「圧迫面接」だと言われるかもしれないが、追いついたのではなくて、これからの修行の始まりだと師から言われたのでした。礼拝の行は永遠に続いてゆくのであります。

雨の日も風の日も、師から罵倒されようが、追い返されようが、ただ礼拝するのみなのだと思つと、実に軽やかな心境になりました。そう気がついた頃に、修行が終わりを告げていました。

いや、終わりを告げたのではなくて、これからの修行の始まりだと師から言われたのでした。礼拝の行は永遠に続いてゆくのであります。

得るものは何もない、ただ礼拝するだけだと気がついたというと、聞いている人は、なんとという無駄なことをしたのかと思われ

れません。そんなことをくり返して、自己中心的に染みついた思い込みや考え方を取り除くのであります。「自己否定」の修行であります。

そんな修行を二十年行ってきたのですが、終わり近くになって、ある時にふと、独参は礼拝の行なのだと思がついたのでした。

独参する際には師の室内に入るのに、三拝して入るのが礼になっています。師家の前で仏を礼拝するのと同じように礼拝するのであります。

これは、師家を礼拝すると言うよりも、その師家を通して、仏陀を礼拝しているのです。仏陀以来伝えられてきた法を礼拝しているのであります。

独参というのは、ただ師の室内に赴き、るかもしれない。実にその通り、無駄といえども実に無駄、大いなる無駄、それをただ行うのみなのです。

何も得るものもないということ、それが分かった時に、真に得たということだと般若經典には書かれています。その通りだと確信したのでした。

そうして礼拝行だと分かれば、実に気持ち軽やかになります。

独参だけではありません、この人生が礼拝行だと思えば如何でありましょうか。

どんな人にあつても、何を言われても、ただ礼拝するのみ、何も得るものもない、ただその目の前の人を通じて、仏陀を礼拝するのみなのであります。

そう気がついてみて、ようやく『法華経』

中央で専ら礼拝するのであります。仏さまがいますが如くにただ礼拝をくり返すのであります。

この人生もただ礼拝行なのだと思ふことが出来ます。咲く花にも手を合わせ、散る花にも手を合わせ、誰に会っても手を合わせず心で接するのであります。

どんな人に対してもただ礼拝の心、拝む心で接することが出来たら、どんなに心穏やかになることでしょうか。

山頭火の言葉に、

「拝む心で生き拝む心で死なう、そこに無量の光明と生命の世界が私を待ってゐてくれるであろう、巡礼の心は私のふるさとであった筈であるから。」(『一草庵日記』)とあります。



礼拝

の真髓が、「常不輕菩薩」にあるということが心から納得出来たのでした。

常不輕菩薩とは、誰に対してもただ礼拝をしていたという菩薩なのであります。人から誇られようと、石を投げつけられようとも、ただその人に対して、「私はあなた方を深く敬います。けっして軽んじたり、見下げたりはしません。なぜならば、あなた方は皆、菩薩の道を行ずることによって、必ず仏になることが出来る方々だからです。」と言って礼拝していたというのが、常不輕菩薩であります。良寛さんも、常不輕菩薩を仏教の理想の姿だとされました。

修行時代には、ひたすら師家を礼拝してきました。何を言われようが、ただ礼拝したのでした。それがすべてなのです。

管長の役目というと、法要儀式などでは、

お盆であります。心から手を合わせ拝む心でご先祖をお迎えし、ご供養致しますよう。

